

スウェーデンの保育 2018

——近年の保育・教育の動向と実践——

講演者：ウェンドラー由紀子 (Yukiko Wendler)

コメント：山本 理絵

2018年度生涯発達研究所の特別公開授業は7月3日に、2018年度日本学術振興会・科学研究費補助金研究（基盤研究（C））「小学校への移行期のインクルーシブ保育・教育におけるプロジェクト活動の展開方法」（山本理絵研究代表）の一環として、教育福祉学部の授業において行われた。以下にその内容とコメントを記す。

〈講師紹介〉

2003年にスウェーデン人の夫の関係でスウェーデンに移り、准保育士の免許を取り、私立の保育園（スウェーデンでは就学前学校という）で何年か勤務した。その後、就学前学校教師の免許を取ろうと働きながら大学に行くことにした。大学には100%行き、仕事は75%働き、3年間を終わらせた。2015年から区立ソフィエルンド就学前学校の就学前教師として働き始め、今年で4年目になる。

1. ソフィエルンド学校附属就学前学校の概要

私の就学前学校はコミュン（Kommun、日本でいう区にあたる）によって運営されている。駅から徒歩5分の街の中心から少し離れた住宅地の真ん中にあり、すぐ側に歩いて湖に行けると同時に街のメインストリートに面して建っているのでとても人気のある就学前学校である。

写真1にある真ん中の建物が私の勤めている就学前学校で、1階には1歳から3歳のグループが8グループあり、1グループには子どもが6人、

保育者が1人つく。8グループの保育者8人の内訳は、准保育士（高校レベルの学歴を持つ者）3人、保育者養成課程で学んでいない者3人、教師免許を持つ者、すなわち就学前学校教師2人である。

保育者は各グループに1人つくため、保育活動にはばらつきがあるといえる。



写真1

スウェーデンでは一般的に、保育チーム（3人1組）で働き、活動内容をディスカッションして様々な活動を進めていく。私の就学前学校では、1グループに1人保育者がつくので、保育内容のクオリティーの平等化のため、時折グループを合わせて話し合うなどして、保育チームを作るように努力はしている。

2階には3歳から5歳のグループが5グループある。1階にいた1歳から3歳グループの6人で構成されていたグループを2つ合わせて12人以上にして1グループを構成する。日本では3歳以上になると1グループのサイズが大人数になると聞いたが、私のところは大体15～16人である。2

人保育者がつき、3歳児は約12人、4歳頃から13人、14人と増えていき、最後の5歳、6歳児グループには15~16人になっていく。

年齢が上の5グループに対しては、就学前学校教師の配置は一つのグループを除いて各グループに一人ずつなされている。保育者養成課程で学んでいない保育者はアルバイトの者以外はいない。食事はケイタリングで、配膳係が常時いるので皿洗いなどは准保育士も含めてしない。また、就学前学校長（就学前学校カリキュラムが2019年度7月1日に改定され、今後Rektor、すなわち校長と呼び名が変わる）が1人、随時いる。子どもの数は全体で大体110人ぐらいである。私は3歳未満児のグループの担当を経験したことはない。私の就学前学校は3歳未満児担当の保育者が幼児クラスに持ち上がり担当をすることはない。これは得意分野を特化するためでもある。

グループにはそれぞれ惑星の名前がついており、私のグループはVenus、要するに金星という。就学前学校教師の私と、もう一人准保育士と一緒に担当している。子どもは15人いる。

2. 就学前学校教育カリキュラム

子どもの権利をスウェーデン語ではBarnkonventionenという。これに基づいて就学前学校カリキュラム(Lpfö98/10/16)というものが1998年に作られた。それまでは就学前学校はあまりステータスが高くなく、遊ぶ場所、親のかわりに子どものケアをする場所、というスタンスであったが、やはり「基礎学校への移行をスムーズにするためにカリキュラムが作られたのである。

すべてのスウェーデンの就学前学校は、国連子どもの権利条約によって守られている。条約は、すべての子どもは同じ権利、価値を持っているとし、子どもの最善の利益を大切に考えている。スウェーデンでは2020年の1月からこの条約が法律化される(2018年6月13日に国会で決定)。

今から20年前の1998年に作られた就学前学校

カリキュラムであるが、教育や保育の現場から見ると、IT化の進歩、移民の問題など様々な問題があり、必ずしも前に作ったものが完全ではないとの考えから何度も改正された。2010年、2016年と改正され、2019年7月1日から最新のカリキュラムが実施されるようになる。

2010年の最初の改正では、大きく分けて二つあると思う。まず始めに国語、コミュニケーション、算数、化学、物理、生物、科学及び技術などの強化が追加された。遊びながら学ぶ姿勢は変わっていないのだが意識をして保育者が子どもに学習をする機会を与える努力をするように、というものだ。ただし、日本でいう習い事とか塾のような形での算数や物理ではない。例えば、遠足の途中に子どもがカタツムリを見つけたら、カタツムリというのはどのように生きているのかなと話すことが生物の勉強であるというスタンスである。私たちが教壇で色々教えているというわけではなく、その話をしたことによって彼らが基礎学校に上がったときに、「あっ、あの子の話は生物だったんだな」という移行のお手伝いをしていくというものであり、知識を詰め込むためではない。

2番目の改正は保育活動のドキュメント化。子どもの学び、視点、遊びや活動などをドキュメント化、要するに書類化することである。写真を撮って、それについてのコメントを書き、それらを使用して教育的ドキュメンテーションを行う教育活動のことである。この教育的ドキュメンテーションについては、また後で詳しく述べる。

2016年の改正では、就学前学校とゼロ年生クラスへの移行手続きが義務化された。ゼロ年生というのは日本でいう小学校1年生である。6歳になる年度に就学前学校を終えた子どもは1年生ではなくゼロ年生となるが、そのときにスムーズな移行ができていない学校がたくさんあった。例えば一人一人の子どもの特性、性格、特徴、特技などの情報を移行することによって学生生活がスムーズに始められるようにするためである。ゼロ年生の担任教師にそのような情報を与えるという

移行の話し合いなどが義務化されたのである。日本では考えられないかもしれないが、1人の子について30分ずつぐらい話すのが私たち就学前学校教師の仕事となった。

義務教育の学校では、OECDによる世界の学力テストを実施するが、残念なことにスウェーデンはとても算数が弱く、毎年懸念されている。どうしたら日本のように学力が上がるのだらうと、スウェーデンでも日本やアジアの小学校教育について興味を持ち、学力向上を懸念している。そこで基礎学校だけで頑張るのではなくて、就学前学校でも小学校入学前に算数のことがある程度わかるように強化するようにと2016年に就学前学校カリキュラムが改正された。私たちスウェーデン就学前学校における算数というのは、詰め込み式ではない。例えば、子どもの前に花と草を並べ、それと同じ花と草を集め同じものに分類するという活動をする。分類というのは算数の最初の基礎になるからだ。また、四角、円、三角形などの算数用語を遊びながら教える。例えば、色々な形と色をした玩具を床に並べ、青い円はどれか選ばせたりという課題を遊びながら算数を教える。

そして、2019年の改訂版カリキュラムでは、“遊びながらの学び”という意味のスウェーデン語でLärandeが、Undervisning、つまり「授業」になった。しかしながらこの「授業」は日本のそれと異なり、保育者が子どもたちになんらかの知識、又は情報を子どもたちに移行する場合を指している。例えば、靴の履き方を指導する、順番の待ち方を教える、などすべての保育活動を指す。それから、無視できないのがIT化である。スウェーデンのIT化はかなり進んでおり、社会ではカード決済がほとんどで現金はほぼ使われない。企業や教育現場では紙と鉛筆もほとんど使わない。そのため、小さい頃からITを教えるべきだということが改正に入れられた。また、前述のとおり、全く専門の教育を受けていない保育者が就学前学校ではかなりの人数のものがあるため、授業をやるとなると差が出てしまう。そのため、就学前学校教師が授業内容の指導を他の保育者にすると2019

カリキュラムに記載されている。スウェーデンには、就学前学校教師以外の者がたくさん働いている。すべての子どもに対して平等にクオリティーのよい「授業」をどのように配置の少ない就学前学校教師が行き届かせるかが、どの就学前学校でも共通の課題である。

3. スウェーデンの保育の現状と特徴

(1) 保育者の資格について

前述のとおり、准保育士と就学前学校教師との差別化が始まった。それは、2015年から、就学前学校教師がいない就学前学校は嚴重警告、監査による執拗な監視をされている。区のホームページにはすべての就学前学校の就学前教師の数の内訳がデータ化されていて保護者たちはそれを元に就学前学校を選ぶことが出来るほど厳しいルールに変わったからである。給与面は、以前はそれほど変わりがなかったが、国の尽力により差が生じた。自分の感覚的な話だが、10年前の就学前学校教師の初任給と2018年度を比べるとおよそ日本円で15万円くらいの差があるのではないだろうか。これは就学前学校教師のステータスを上げると共に就学前学校の保育のクオリティーを上げたいという強い意志が国にあったからである。

(2) IT化について

さきほど述べたように、ITを多用に使用した就学前学校での活動は無視できない、やらなければならない熱い話題である。ITには一般的にはゲームやアプリを子どもにやらせるという印象が日本人にはまずあるのではないだろうか。スウェーデンのほとんどの保護者もITという言葉がどの授業に反映されているのか、どういうことをやるのかを把握していない。私たちの言っているITというのは、ゲームをするなどの消費者としての受け身的な使用のことでなく創作側のITを意味している。日本でもプログラミングが義務教育で2020年より行われるようになるそうだが、スウェーデンでは日本が取り入れるより

もかなり以前に、法制化に先んじて学校がプログラミング教育を始めていた。就学前学校のITは2016年にカリキュラムに改正されたときに記載されるようになった。私が言うITはプログラミングだけではないので、就学前学校のレベルでのITについて紹介する。

私が行っている就学前学校レベルのITは、4つに分かれている。一つはグリーンスクリーン。スターウォーズのように背後に実際には星やロケットはないが、背景にそれらが映されるようなものである。例えば、背景に宇宙を入れたら、映像では宇宙のように見える技術である。

次に、QRコード。これは、日本の企業が発明したそうだが、携帯などでアプリを使ってスキャンするとホームページが出てくるようなものを示す。QRコードを庭や部屋に隠しておいてQRコードに従って宝探しをしたり、歌集の代わりに使ったり、色々な課題が入ったものをスキャンしながら取り組んだりするなど使用目的は多様にある。3つ目はプログラミング。プログラミングについては後で紹介する。最後にITを使った環境作り。照明を利用して影を利用した遊びを促す環境を作る。プロジェクターに映像を大きく壁やスクリーンに映し大きな面積で映像を多数の子どもと同時に経験する。粘土をするときも机の上ではなく、ライトボードを使い、粘土の厚みによって色のニュアンスが変わるのを経験させたり、葉やミミズなどを置いて透かして見える詳細などを観測するため利用したりする。また、Makey-makey (メイキー・メイキー) といって、電線と伝導体物質をつなげることによって音が出る器具があり、これは子どもにどの物質が伝導体物質で、違うのかを遊びながら教えるキットである。

スウェーデンには20県あり、区が290ある。その290区の中でも、私が住むソーレンツーナ区はトップレベルに入る就学前学校および基礎学校のITの普及率、高クオリティーを持っている。私はコミュニケーション児童課責任者により他の6つの就学前学校の教師らと共に代表者として選ばれITチームを作り、ソーレンツーナ全体の就学前学校

のITのクオリティー向上のプロジェクトを組んでいる。その中で際立って活発な人たちが政治家にITをスウェーデン全土に渡って浸透させるよう予算を組むようになど、直接請願している。プログラミングやIT環境整備に資金が必要なので、国会に資金調達を働きかけるアクティビストがたくさんいる。私たちソーレンツーナ区を発信地としてIT化を進めていこうと考えている。ITを就学前学校にも浸透させようと私が興味を持ったのは就学前学校の環境が社会でなされているそれとあまりにかけ離れてしまうのは子どもにとっては不公平であり、就学前学校を社会と隔離してしまうのは良くないと思ったからだ。さらに、いくらスウェーデンが社会福祉国と言っても、貧困のためすべての子どもがITに対して同じ知識があるとも限らない。国連子どもの権利条約でうたっているすべての子どもは同じ権利が与えられるということのを全うするのならば就学前学校にもITは必要と考えたからだ。しかしながら年配の保育者などは自分自身がITに対してあまり長けていないことから失敗などを恐れIT活動に否定的である者が多く、ITに興味がない者が多い就学前学校ではITをほとんど使っていないところもまだまだスウェーデンでもあり、大きな課題である。

(3) 教育的ドキュメンテーション

ドキュメンテーションというのは、動画、写真、子どもの言ったコメントの記録など、保育活動を目で見て使用できる資料をいう。これらドキュメンテーションを使って活動内容を考察しながら活動を進めると教育的ドキュメンテーションとなる。ドキュメンテーションは資料であり、教育的ドキュメンテーションは資料を使って観察、考察、評価をして保育活動を進めていく方法のことをいう、という二者の大きな違いをまず理解しておかなければいけない。

スウェーデンで活動をどのように教育的ドキュメンテーションを利用して進めていくか説明する。前述のとおり、2010年に教育的ドキュメンテーションの使用が義務化された後、以下のよう

に活動は進められなければいけない。毎学期の始まりに保育者たちは写真や映像をたくさん撮り、子どもが今何に夢中になっているかなど観察する。写真を印刷してそれを目の前にし、グループ担当保育者全員と子どもたちと話し合う。写真2がそれを行っているところである。話の内容は、これは今何をしているのかな？ 何でそんなに面白いのかな？ 何を知りたい？ どんなことをこれからしてみたい？ など。その意見を元にテーマ活動を決める。テーマが決まり、ある程度活動が始まると活動をドキュメンテーション化し、それを子どもの目につくところに展示する。写真3は先日やった活動を展示しているところに自分の理解している部分をお互いに説明し合っているところである。子どもが描いたものを壁に貼っておくと、角砂糖に集まるアリのように子どもたちが寄ってくる。「これ、僕が描いたやつだ、これはこうで、これはこうで」と説明しているところである。その瞬間をまた写真を撮ったり、動画を撮ったり、彼が何を覚えていたか、今度は何をやりたいと話していたかというのをドキュメント化して、またそれについて保育者同士で話し合って次の活動へ繋げていくというのが教育的ドキュメンテーションを使った活動進行である。教育的ドキュメンテーションを使った活動進行は必ず保育チーム全員同じ知識があり、協力のもとに進めていかなければ出来ないし、最初から誰もが出来る



写真2

わけでもない。何年も努力した経験の上に来るようになっていくものである。

日本の保育者たちによく勘違いをされるのだが、スウェーデンのグループは少数なので教師は楽をしていると思われがちだが、この教育的ドキュメンテーションを遂行することにより以前よりやるが増えている。子どもたちや他の保育者に意見を丁寧に聞き、話し合いの結果活動内容を決めるのは、活動内容を保育者一人が決めるより時間的にはかなりかかる。一人に対する活動内容が実に手厚く、タブレットを常備し、休みなしにずっと写真や動画を撮り、ドキュメンテーションを試み、活動内容を考察し、活動内容を修正していくのは、予定が全く立たず決められたカリキュラムを進めていくよりはるかに大変だということがいえる。しかし、私は前が見えないからこそ楽しいと思う。



写真3

繰り返しになるが、壁に貼られた写真や子どもの活動の記録はドキュメンテーションであるが、子どもたちや保育者がドキュメンテーションについて話している間に教育的ドキュメンテーションになる。まさに写真3はその瞬間をとらえているのである。つまり、ドキュメンテーションを使わなければ教育的ドキュメンテーションにはならず、ただのお飾りである。日本でいう日報とかお知らせというのは教育的ドキュメンテーションではなくて、ただの保護者に対する報告書である。そこに会話が生まれえないような場所に貼られたり、内容であったり、子どもにわからない言葉で

書いてある内容の場合には、子どもが使えないので教育的ドキュメンテーションにはならない。スウェーデンの教育的ドキュメンテーションは活動を進めていくための道具ということを理解していただけたらだろうか。

では、なぜ教育的ドキュメンテーションを使うのか。その理由は、スウェーデンの保育の特徴にある。プロセスが重要で、結果は重要ではない。例えば、あの保育園に行くと誰でもでんぐり返しができるようになるとか、この保育園に行くと英語をしゃべれるようになるといった売り文句は、スウェーデンでは一切見かけない。子どもが何が出来るようになったかではなく、テーマ活動を通し、プロセスの途中で何を学んだかが大事だと思うからである。

次に、就学前学校カリキュラム (Lpfö98/10/16)、教育的ドキュメンテーションとテーマ活動の関係について述べる。まず始めに、前述のとおり、就学前学校カリキュラムは私たちの六法全書のようなもので、実施する活動は必ずそれに関連していなければならない。例えば、保育活動を利用して子どもたちを偏った宗教などに洗脳しようとする保育者がいるとしたら、それは教育カリキュラムに従っていないので、その活動は許されないということになる。自由奔放な保育活動を進めているようにとらえられがちだが目的は必ず就学前学校カリキュラムに沿っていかなければいけないというのがスウェーデン保育の特徴である。今、自分がとった態度は正しいかどうか、人に聞くのではなくて、就学前学校カリキュラムを見直してみるという具合に、保育者全員がきちんと実行している。

次に、教育的ドキュメンテーションを使って活動内容を決める。子どもの興味や視点が出発点である。教育的ドキュメンテーションを使って決めたテーマ活動は子どもたちが夢中になっていることなので、子どもたちは色々なことを興味深く、楽しく遊びながらどんどん学ぶ。子どもが自分の好きなことを自分たちで進めることによって就学前学校カリキュラムの一番大切にしている民

主主義を子どもたちは身をもって体験することができる。話し合いによって保育者と子どもたちで決めた活動内容が実際に実行され、遂行される。自分の意見が聴き取られ、それがすぐ反映され、次にまた続くことによって自分の意見が周りに影響を与えることを学び、それはすばらしいことだと学ぶ。スウェーデン人は私の経験上プレゼンテーション能力が日本人に比べてとても高いと思う。自分が社会にとってとても重要な存在であるという考え方があるので若者を含めた選挙の投票率は85パーセント以上を常時キープしている。テーマ活動によって、プレゼンテーション能力が高く、社会貢献度に長けていて、自分の意見を持っている人間形成をする手伝いをするのが保育者の役割であると私は思う。お絵かきをしてそれを壁に飾って保護者に展示するのが目的ではなく、子どもが自分の意志で考えて絵の具で何が出来るかを試みた活動を通して経験を私たち保育者は与える手伝いをしている。子どもが例えば雪の上で絵の具を使ったらどうなるだろうかと言えは絵の具を持ち出し挑戦してみる。雪の上に描いた絵は家にも持ち帰れない。しかし、雪の中で絵の具を使うとこんな感じだったとか、色を混ぜるとこうなったという経験は一生覚えている。絵を描けるようになったことが大事ではなく、自分の意見が活動になり、そのプロセスで学んだ絵を描く経験をすることが、就学前学校カリキュラム (Lpfö98/10/16)、教育的ドキュメンテーションとテーマ活動の関係によって作られていくことがおわかりになっただろうか。

4. テーマ活動の実践(2018年1月～6月)

(1) 子どもたちの興味を観察する

それでは実際に私の保育チームが2018年1月から6月までに行った実践を紹介する。

スウェーデンは、新年度が8月から始まり、8月から12月の5カ月を秋学期と言う。1月から6月までを春学期と言う。6月後半から7月後半又は8月前半ぐらいまで、大人も子どももみんな休

みを取る。大人も大体4週間か5週間休み、充電して8月から仕事をすることが、法律で決まっているため、誰でも4週間以上休みを取らなければならない。保育者も全員長期休暇を取れるように複数の就学前学校が協力し合い、夏の間3週間ほど閉鎖するのがスウェーデンでは一般的である。

さて、1月になり、新学期に帰ってきた子どもたちの視点、興味を調べるためにドキュメンテーションを集めることから保育者は仕事を始める。計画などは1月には立てない。ドキュメンテーションがある程度集まると保育チームでそれらを考察する。なぜチームで行うかと言うと、一人で見ていると自分の目というフィルターを通してしか見ていない。写真を撮ったものを見ながら他の保育者と話し合えば、色々な角度からそのドキュメンテーションを見ることができる。

よく日本の保育者に聞かれるののだがどういふときにドキュメンテーション、すなわち写真や動画を撮るかということだが、学期始めの観察の時期は特に子どもが普通に自由に遊んでいる時間にする。たくさんある本の中から恐竜の本を持ってきて見ていたり、他にもある玩具の中から恐竜の玩具を並べたりしているのが日を追って何回も見受けられた。写真4がその行動を表しているのがおわかりになるだろうか。毎日のように恐竜に興味

を持っていたということである。もちろん恐竜以外に興味がある子もいるが、色々なドキュメンテーションを集めて話し合った結果、15人中7人ぐらいの子たちが恐竜に興味があることがわかった。

もう一人の保育者も私と同じように、子どもたちが恐竜に興味を示している場面を何度も何度も見ていた。写真4は同僚の准保育士が作ったドキュメンテーションである。このドキュメンテーションを元に子どもたちに何をしているか質問をする。まさにここが教育的ドキュメンテーションを行っている例の一部である。

観察により女の子は人形に興味があることがわかった。女の子はほとんど、恐竜ではなくパービーなどの人形が好きである。スウェーデンでも教育的ドキュメンテーションの使い方を習得していない者がよく聞いてくる質問なのだが、グループの一部の興味が全体の活動を決めていいのだろうか、というものだ。答えは決めていい、である。学校庁 (Skolverket) Uppföljning, utvärdering och utveckling i förskolan (2012, p. 29) にも記載されているが、子どもは今日の前で進んでいる活動の一部であり、活動はその子どもと切り離すことは出来ない。活動はどんどん進化していくのでプロセスの間に必ずどの子どもの興味も活動を動かすことができる場所に教育的ドキュメンテーションを使った活動をしていく意味があると学校庁は言っている。テーマ活動が進化していく中で就学前学校カリキュラムが推奨しているITをどのように取り入れようか、そして、恐竜に興味のない女の子たちにも興味を持ってもらうにはどうしたらいいだろうと保育チームで話し合った。逆に、男の子は恐竜ばかりで遊んでいるので、どうにかしてごっこ遊びをしてもらえないだろうかということも話し合った。計画を立てるとはこのような方法に重点を置き、結果を出すための計画ではない。そして、就学前学校カリキュラムにある国語、算数、理科、社会、体育、民主主義などの分野と恐竜をシンクロさせるか。就学前学校という民主主義とは、みんなで決める、みんなで約束を守る



写真4

という、いったようなことである。観察計画期間は1カ月ぐらいである。

ドキュメンテーションを考察の際に使う理由は「私はこう思う」という主観性を取り除くことが出来るからである。この動画についてどう思うか、この写真についてどう思うかを話すのであって、持論を元に話し合いが始まることはない。「私は大事に思う」ではなく、子どもがこうなんだとドキュメンテーションを見ながら話ができる、とてもよいツールだと思う。スウェーデン人は前述したように自分の意見をいうのが優れているので討論はかなりうまいため話し合いは白熱することが多々ある。しかし、ドキュメンテーションを使っているときはドキュメンテーションに集中するため、もめないことが多い。

1月後半、恐竜をテーマにすることを保育チームでまず決め、子どもに承認を取り、活動を進めていくことになった。

(2) 恐竜について知っていることを記録する

まずテーマ活動を始めると、保育者たちは、子どもたちがどれだけテーマである恐竜のことを知っているかを、子どもたちと話し合いながら調べていく。しかし、子どもに面と向かってインタビューしても子どもは固まってしまうので本当に言いたいことを言ってくれない。そこで、自由時間に恐竜のことだけを考えられるような環境(写真5)を作り、絵を描かせる。女の子はハローキティー

などを描いているが、その横で男の子たちが「今は恐竜を描く時間なんだよ」などと教え合って、何となく修正しながらやっていく。

写真6は彼らが一生懸命描いてくれた絵の一部である。ここの線は何を描いたものなのか、記録をとる。大変時間がかかるが、必ず一人一人に聞いて行く。そして、恐竜についての動画なども見せる。動画を見せているときに子どもたちが色々教えてくれる。それも記録にとる。レジオ・エミリアもそうであるが、この1月の段階では子どもの言っていることをとにかく書くのが仕事である。



写真6

テーマ活動を始めてすぐの頃、恐竜の動画を見ていたときに恐竜は大きいという話を子どもたちがしたので、恐竜の約20メートルという体長を体で感じさせるために20メートルのテープを廊下に貼った。子どもたちは「わーっ、大きいね」



写真5



写真7

などと言う。彼らが好きな恐竜を算数や体感を利用して遊びながら 20 メートルを感じることもできる。逆にメートルという単位から小さいセンチメートルという話をしたり、重さのグラム、キログラムなどに子どもたちの興味が移行すれば小さな恐竜と同じ重さの石を探して秤で量って比べたりなど、大きいという言葉から活動がどんどん進化していった。この子どもの一言のおかげで算数を取り入れることが出来た。

(3) 恐竜ランドを三次元で表現してみよう

子どもたちは恐竜の玩具で遊ぶのを好んでいたため、恐竜たちを置けるような恐竜ランドを作ることを子どもと保育者チームで決めた。恐竜ランドを作る前にどんなものを作るか話し合いをした。写真 8 は、新聞をぬらしたものを土台としてダンボールの上に作った上にギブスを上層部分に載せ、固めて山を作り、恐竜ランドを作っているところである。土台を作るところまでは保育者たちが手伝ったが、その後は子どもたちに全部やらせたいと思った。何がランドにあるかまで子どもたちの力だけで決めていく。保育者は子ども一人一人の希望を聞いた。木、森、芝生、花、海、湖、石、太陽、山、洞窟、そして惑星を作りたいと話



写真 8

してくれた。これらを書き留め、恐竜ランドが出来上がるまで見えるところに展示しておいた。

それぞれの恐竜ランドの部分は何日もかけてゆっくりゆっくり作った。子どもたち全員の希望が入った恐竜ランドが完成した (写真 9)。

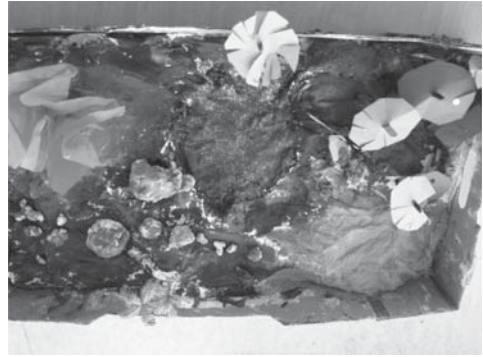


写真 9

恐竜ランドが完成したからと言って、展示して触れないようにするとか、保護者へ発表をするわけでもない。私たちは子どもたちがいつも遊べるように子どもが遊べる場所に置いておいた (写真 10)。壊れたら壊れたで、どうして壊れたのだろう? もっと扱い方を大事にしないといけない、みんなの共有するものだから、など毎日のように話し合いながら、恐竜ランドは壊れたり修正されたりしながら、結局 6 月まできちんと残った。自分たちで作ったものなのでとても大事にした結果ではないか。



写真 10

恐竜ランドを三次元で作った後、子どもたちの創造力を高めるためにも IT を利用して二次元で融合したいと思った。どのように IT と融合をし

たかと言うと、恐竜ランドの上に玩具の恐竜を子どもたちに好きな場所に置かせる。そしてそこを写真に撮る。そして少し場所をずらしてまた写真を撮る。この作業を何十回か行った後写真をつなげることによって、恐竜が手で動かさなくてもまるでひとりりで動き回っているような動画になる。これは Stopmotion というアプリを使った。動画を作った後、子どもたちが恐竜の動きに合わせてお話をアフレコし、ショート映画を作った。4~5歳児が起承転結を考えて、時間内に話を作るのはとても難しい。このような活動をするによって子どもは自然と作文能力、国語、プレゼンテーション能力を学んでくれたと思う。

(4) 恐竜から派生してきた疑問や活動

ある日、恐竜は卵から生まれるということ子どもたちは知っていたので、子どもと卵を作ってみようと相談した。恐竜のお友達のドラゴンのマスコットの Berta が秘密のレシピを私たちのグループに置いていったという設定にし、その通りに子どもたちと恐竜の卵を作った。作り方は白豆を水に一晩漬けて置き、それをギブスを丸めた中に入れて置くというものだ。水でぬらした白豆を入れて放っておくと、そのうち芽が出る。芽の勢いでギブスの卵が割れる。毎日子どもたちは卵がいつ割れるか楽しみにしていた。4、5日すると子どもたちが卵が「割れた」と言う。割れた卵の中には私たちがこっそり隠しておいた玩具の小さな恐竜が出てきた (写真 11)。これを見て



写真 11

子どもたちがとても喜んだのは言うまでもない。恐竜から派生して生物 (豆が水分を含むと根がものすごい力で出てくることを学んだ) の活動につながった例である。

活動を進めていく途中に、恐竜には肉食動物と草食動物があるということにも子どもたちが興味を示し、どういうものが肉食、草食なんだろうという話が出てきた。そこで私たち保育者は草食、肉食が半分くらいになる割合で、二枚組みになる恐竜カード (写真 12) を作り、神経衰弱遊びをして、恐竜の名前を一緒に覚えたり、どの恐竜が草食、肉食などと語り合った。私たち保育者も知らなかったのだが、草食恐竜の背中には自分を守るためにとげがあり、肉食恐竜は全部の歯が尖っていて爪が鋭いなど、子どもたちから教えてもらった。子どもと一緒に遊びながら学び、知っている子どもが知らない子どもに教えたり、新しい知識を大人も子どもから学ぶという、いい例の一つだと思う。この活動も動物の種類などにかかわる生物の活動の一つになった。



写真 12

恐竜ランドを作ったときに芝生を作りたいと言った子どもがいたことから、恐竜が生きていたときに芝生はあったのだろうか? という話に流れていった。芝生はずっと刈らないとずっと伸びてしまう。伸びるとはどういうことだろう、植物には何が必要なのかという話になった。子どもたちは前年度に植物の種を蒔いたときに、日光、土、水が必要なることを知っていた。それほど長時間の活動ではないが、一応また芝生の種を植えてみた

りもした。これも生物の活動につながったといえよう。これらの例から判るように、もとはといえばテーマ恐竜だったのだが、そこから色々な子どもの興味や意見から活動が生まれ、それらがすべて教育的カリキュラムに基づいているということだ。

IT を特化した活動にしたいと新学期の始まりに目標を立てていた私は、この植物の話題になったときに植物の科目である生物と環境問題や科学を IT を利用して融合することはできないだろうかと考えた。花が育つには、木が育つには、人間が育つには何が必要なんだろう、あってはいけないものはなんだろう、チューインガムやごみなどは要らないもので、要るのは太陽と水と土なんだということを子どもたちに遊びながら IT を融合して教えたい。

そこで私は二通りの IT を使ってこの植物が成長するのに必要な要素を子どもたちに遊びながら教えることを選んだ。一つ目は Blue-bot (ブルーボット) というツールがあり、日本円で一台 1 万円ぐらいで買える。二年前に新しく私の勤め先の就学前教育で購入した教育玩具だ。これは、日本で今、言われているプログラミングの第一歩となる玩具である。ブルーボットの背中に前進、後退、右、左の矢印があり、その矢印を一回押すごとにブルーボットは 15 センチずつそれらの方向に進む。そしてブルーボットは専用のビニールシートがあり 15 センチ×15 センチに仕切られた上に載せて使用する。専用のビニールシートは市販のもの

もあるが私はわざと透明のものを利用し、自分で 15 センチ×15 センチの線を引いてシートの下にあえて色々な写真や文字や数字を置けるようにした。今回植物に不必要なチューインガムと必要な太陽と水と土を置く。出発点にブルーボットを置き、子どもたちにガムを踏まないように、そして、植物が絶対ないと育たない、水、土、太陽を通してどうやって花や木の絵がある、すなわちゴールまで進むかを、プログラミングさせた。この活動でプログラミング (IT) と生物、科学の融合させることができた。

二つ目は、Makey-makey (メイキー・メイキー) というどの物質が伝導体であるかを遊びながら子どもに教える教育玩具である。たくさんある配線を伝導体物質につなげ、ネット上のアプリと PC のソケット部分、そして最後にアースとなる金属の部分で自分が触れながら伝導体に触れると、軽い電流が流れ音がアプリから流れる仕組みになっている。写真 14 で判るように 5 本の配線がそれぞれ太陽、水、土、の絵が描いてあるシルバーテープ (伝導体物質) につながっている。ガムと釘の絵が描いてあるシルバーテープは途中わざとよく見えないように切った。なので電流は流れない仕組みになっている。この活動をしたときに絶対あせってはいけないので二人一組で子どもたちが理解するまで何をするかを説明した。内容は、植物が成長するには何が必要かな? 必要だと思うものだけを触ってみよう。一人ずつやってもらうため、アースを一人だけに持たせる。アースを持つ

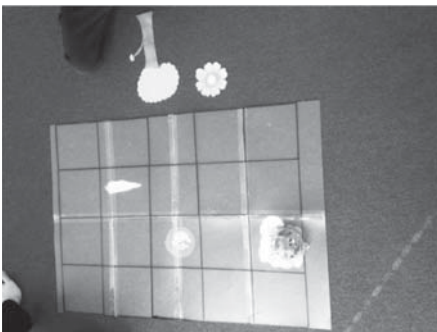


写真 13

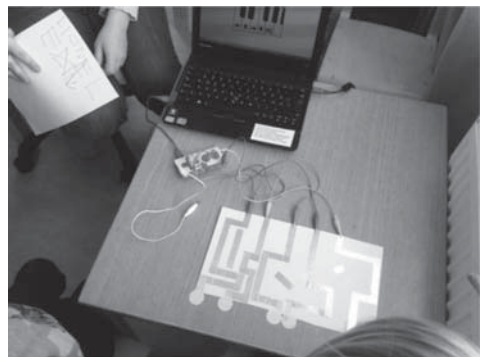


写真 14

ている子が、太陽が必要だといひながら太陽の絵の部分に触ると絵は直接シルバートープの上に載っているのでアプリが反応して音が鳴る。間違えてガムに手を添えると反応しない。という仕組みになっている。

子どもたちは何度も音を楽しみながら、音がなぜ鳴らないのかを理解しながら、そして最終的には植物に必要なものは何かをこの活動によって深く理解することができたように私は思える。

前述の神経衰弱で使った恐竜カードは、サムリング（お話などするときの集まり）の時間に私が紹介したのだが、子どもたちの手の届くところにいつも置いておくと、子どもたちは自分たちでやるようになった。自分たちで順番を守って、1回当たったらもう1回できるとか、きちんとやるようになってきた。これなども社会性を育てている。一つのルールでみんなで作るといふことも子どもたちは学んだ（写真15）。



写真15

色々な観察や話し合いによって恐竜の絶滅については、いろいろな説があるが、子どもたちは、寒くなって死んでしまった、食べ物がなくなってしまった、惑星から何か落ちてきて暗くなったなど、ということを知っていることがわかってきた。寒いという話が出たとき2月のスウェーデンのように寒いと雪や水で地面が見えなくなるから恐竜は食べ物が見つからなくて死んでしまったのだね、などと話し合っているうちに、氷というのはいつできるのかという話になった。それを調べるために私たち、保育者は風船の中に水を入れて、

それを屋外に出した。私のグループの部屋のドアを開けるとすぐベランダになっているので、そこにその風船を置いておいた。すると、翌日氷になった（写真16）。氷は青い、いや、透明だ、と話しかけている子どもたちにヒントをもらい、氷には色が塗れるのだろうか、試してみることにした。しかし何も描けなかった。結果は汚い色の絵の具が水に薄まっただけになった。それでも保護者も子どもたちも何かこの活動で学んだのではないだろうか。

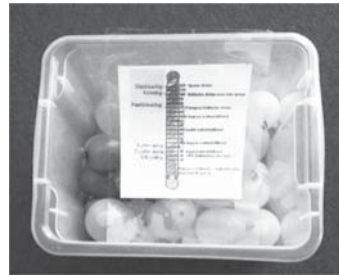


写真16

そして、残った氷の上に色々なものをかけてみた。スウェーデンでは真冬道路が凍る前に区が道路に塩と砂利の入ったものをまく。塩が氷を一番速く溶かすからという事実から、塩をかけてみた。どのくらい何もかけていないものと差が出るのかと調べるために、何もかけていないもの、それから、砂糖をかけたものも試してみた。実際の結果は氷の大きさがあまり大きくなかったことと、長く待ちすぎたため、全部同じスピードで溶けてしまい、大失敗に終わってしまった。それよりも実験の途中に子どもはみんな砂糖が好きなので、子どもたちが楽しそうに砂糖をなめあっているのが一番楽しかった経験だったのでないだろうか。スウェーデンの保育者はむやみに答えを教えない。「塩が一番速く溶けるのを見てみよう」と、言うのではなく、「子どもたちに何が一番速く溶かす材料かな？」といった形の質問をする。子どもたちは砂糖が好きなので大勢が砂糖だと仮定してしまった（写真17）が、それでいいのである。なぜならば、自分たちで探求する姿勢を得てほしいからだ。



写真 17



写真 19

(5) 工作で作った恐竜を作って動画を作る

工作も恐竜のテーマに合わせて行った。紙皿やトイレットペーパーの芯などを使って恐竜を作る(写真 18)。



写真 18

この工作した恐竜も飾るだけではもったいないので、私は IT と融合させて、息を吹き返したいと思った。私は子どもが作った恐竜を一個一個写真に撮り、Pappets Pal (写真 19) というアプリでトリミングをして、それを子どもたちが選んだいろいろな背景の中に入れて、恐竜のお話を子どもたちに作ってもらった。

自分たちが作った三次元の恐竜を自由に動かし、自分のお話を作り、出来上がった動画を子どもたちだけで見てそれぞれ感想や拍手を送りあった(写真 20)。その後保護者用の連絡アプリに動



写真 20

画を送って保護者たちにも見てもらった。

自分たちが作ったものを見て感想を言い合っただけで次の活動につなげていく。これも教育的ドキュメンテーションである。

学期末にグリーンスクリーンを使い、今度は子どもたち自身が自分たちが作った恐竜ランドの中に入って見る動画を作った。まず、背景のグリーンスクリーンを自分たちで作った。大きなダンボール紙に緑色で子どもたちと一生懸命塗った。その後、グリーンスクリーンの前で子どもたちに色々な恐竜になったつもりで動いてもらう(写真 21)。恐竜ランドの背景と子どもたちの動きの録画を Green Screen というアプリに入れ込み音を入れる、アフレコをするなど編集をして動画を作った。この動画は学期末近くに、保護者たちを招い



写真 21

た Dropp-in-fika (ラフなお茶会) 際に自由に立ち寄って見られるようにして常時動画を流し、自由に子どもと一緒に鑑賞してもらった。子どもたちがどうやって作ったか一生懸命保護者に説明しているところを見ると子どもたちがテーマ活動の過程で本当に色々な方面の知識を得ていることが聞き取れた。

(6) テーマ活動を終えて

テーマ活動を終えて、新学期当初目標にしていたことはすべて達成できたのではないかと、保育チームで評価した。最初人形にしか興味がなかった女の子もすべての活動に楽しそうに参加し、最後のグリーンスクリーンや IT を使った動画作りなどは女の子が得意なおしゃべりが功を奏してお話作りに厚みが出来た。男の子は動画を作る過程で普段なれないお話作りをする機会を持って、それを楽しいと喜んで何度も動画作りに参加してくれた。女の子は1月には恐竜に興味はなかったが、5月後半には恐竜を使ってごっこ遊びをしていた。恐竜という一部の男の子だけの興味から始まったテーマ活動だったが、このように、大きさを調べるところから(算数)恐竜の名前が書いてあるカードと一緒に読んだり覚えたり(国語)恐竜ランドから派生した芝生から自然科学を学んだり、氷河期の話から氷の実験(化学)をしたり、色々な IT 技術を利用してプログラミング、又は情報

科学の勉強(すべての動画は本物ではなく作ることが出来る)など教育カリキュラムに記してあるすべての目標を達成することができたのではないだろうか。そして何よりも大事なのは、子どもたちが自分たちの力で協力し合いながら民主主義のもと活動を進めてきた自信と貢献することのすばらしさを何か得てくれたのではないかと思う。

私は最後に保護者向けにこれらすべての活動を iMovie というアプリを使い2分くらいの動画を作った iMovie は簡単に自分の撮った写真や動画を入れるだけで音響効果や映像効果がプロ並みにしてくれるものだ。これを最後に保護者たちの連絡アプリに送信してテーマ活動を終えた。この動画は子どもの学びのプロセスを残す記録になり、保育者にとっても評価の材料になり、子どもや保護者に対してはよい思い出を記録したものとなった。

参照

Skolverket (2012). *Uppföljning, utvärdering och utveckling i förskolan - pedagogisk dokumentation*

(ウエンドラー由紀子)

〈コメント〉

(1) 就学前学校カリキュラムの位置づけ

スウェーデンの保育事業は1996年に福祉部門から教育部門に移管された。そして、就学前学校については、1998年、2010年の学校法の改正によって、教育制度の最初の段階として明確に位置づけられ、その役割の強化が謳われている。就学前学校カリキュラムは、義務教育や高等学校のカリキュラムと同等に位置付けられた法的拘束力をもつものであることから、「ナショナルカリキュラム」とも呼ばれている。そして、保育環境や保育内容の監査も厳しく行われ、そうやって保育の質を全体的に上げていこうとしている。

日本の幼稚園教育要領、そして保育所保育指針も(2008年改定より)、法的拘束力はあるとはいわれているが、義務教育段階に比べて柔軟に運用

されており、スウェーデンとの違いを把握しておかなければならない。

しかし、スウェーデンの就学前学校カリキュラムには、日本のように領域別に細かなねらい・内容が記されているわけではない。就学前学校の任務や理念、基本的な価値観や、就学前学校が一人ひとりの子どもの発達をどのような方向性で援助していくべきかという目標が示されている。これらの目標は、子ども達が達成しなければならない目標ではなく、あくまでも保育者が子どもの発達や学びを援助する方向性を示したものである。そして、これらの目標をどのような具体化するかは、就学前学校や保育者に任されている。

(2) スウェーデンのカリキュラムの変化

スウェーデンの就学前学校カリキュラムは、ウエンドラー氏も述べているように、学びを重視する方向に改訂されてきている。2018年の改訂(2019年実施)では、就学前学校の任務に関する詳細な記述が増えるとともに、子どものケアと発達と学びを援助する就学前学校教師の役割を他の学校種と共通の *undervisning* という用語で位置づけ、その責任を負うことを明記している。

しかし、それは、遊びを軽視しているのではない。2010年改正の学校法には、就学前学校の目的として「子どもの発達と学びを励ますとともに、子どもに安心できるケアを提供する」ことや、「教育活動は、子どもを全人的にとらえ、子どものニーズに基づいて、ケアと発達と学びが一体となって行われる」ようにすることがあげられている。ケアと教育が密接に結びついているとの理念に基づき、遊びを通しての成長と学びが重視されている。

2018年に改訂されたカリキュラムで加筆された「就学前学校の任務」の部分にも、子どもを全人的にとらえること、発達と学びとウェルビーイングの基盤として遊びが重要であることなどが書かれている。

(3) 子どもの権利条約の理念

スウェーデンは、国連子どもの権利条約の成立

に貢献した国の一つであり、条約が国連総会で採択された翌年の1990年6月に批准し、子どもの権利を護るための法制度の整備に取り組んできている。就学前学校カリキュラムは、このような社会背景の中で作られ、2010年改正の学校法の第1章に「子どもの最善の利益」が、すべての教育およびその他の活動の基礎となることが明記された。ウエンドラー氏によれば、さらに、子どもの権利条約が法律化されるということである。それゆえ、2018年のカリキュラム改訂では「目標と指針」の章の中の「子どもによる影響」の節の内容に「参加」という概念が加えられ、子どもの意見表明権や参加する権利の保障が強調されている。

就学前学校が、子ども自身のいろいろな形で表現されるニーズや関心に基づいて環境構成や計画作成をすることは、子どもが就学前学校での生活に影響を与えることであり、いろいろな形の協力や決定に参加するような体験が民主主義の原則を理解し行動する能力を育てると捉えられているのである。

日本では、2017年4月施行の改正児童福祉法で、初めて、すべて児童は、児童の権利に関する条約の精神にのっとり、福祉を等しく保障される権利を有すること、社会のあらゆる分野において子どもの意見が尊重され、その最善の利益が優先して考慮されるよう努めることが明記された。ようやく、理念的に子どもが保護される客体から権利の主体としてとらえられるようになったといえる。しかし、2018年度から施行されている新幼稚園教育要領や保育所保育指針には、このような子どもの権利条約の文言はあまりみられず、「子どもの権利」の視点は明確だとはいえない。

(4) スウェーデンの保育実践から学ぶもの

ウエンドラー氏の実践から学ぶことは、とくに、保育内容(活動)は子どもたちと保育者が一緒に決める、保育計画の作成に子どもが参画するということである。その際まず、子どもたちをよく観察することが重要である。スウェーデンの就学前

学校では、自由遊びの時間が多く、その時間に子どもたちが何に興味を持って遊んでいるか、1か月間ほどじっくり観察している。その間に記録をとり、教育的ドキュメンテーションを行って、テーマを決めていっている。テーマが決まった後も、保育者はそれについて子どもたちが知っていることを聴き取っていくことを大事にしている。

しかし、保育者は、子どもの興味があることをただ聴いているだけではない。まだあまり興味を持っていない子どもも興味を持てるように、またより疑問をもって考えられるように、子どもの声を逃さずに、動画を見せたり、長さを体感させたり、作ってみることを提案したりしている。そして、教育カリキュラムに沿った学びが深まるように、ITの活用を含めた活動を準備して提案している。

日本の新幼稚園教育要領では、幼児の「主体的・対話的で深い学び」や「カリキュラムマネジメント」が強調されている。保育者が計画を立てて振

り返ることは意識されているが、大人の思いが先に立った計画になってしまい、それを子どもたちに達成させる保育にならないか危惧されるところである。そうならないためにも、教育的ドキュメンテーションを使う意味がある。スウェーデンの保育から、子どもの声に耳を傾けながら子どもと一緒に保育をつくっていく姿勢を私たちは学ぶ必要があるだろう。

参考文献

- 白石淑江「第2章 スウェーデン王国」泉千勢編著『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか—子どもの豊かな育ちを保障するために—』ミネルヴァ書房 2017年
白石淑江・水野恵子著『スウェーデン保育の今 テーマ活動とドキュメンテーション』かもがわ出版 2013年
Läroplan för förskolan (SKOLFS 2018: 50) Reviderad 2018.

(山本 理絵)